



水稲育苗中における苗立枯病防除対策

育苗中に発生するピシウム菌やフザリウム菌などによる苗立枯病対策としては、**予防が基本**です。播種前や播種時に農薬を育苗箱施用しますが、不幸にも病害が発生した場合は、早期に薬剤による防除を実施します。緑化期より後に使用できる登録農薬が限られているため、種子や育苗資材などの消毒を徹底するとともに、病害の発生しにくい環境づくりや適正な灌水管理を行いましょう。



育苗中に発生する主な病害

1) 細菌病

細菌病には種子伝染する**もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病**があります。細菌病はいずれも、高温、多湿条件下で発生しやすくなります。防除対策として、種子消毒や播種時に薬剤処理する方法がありますが、**育苗中に防除する登録薬剤がありません**。このため、育苗中は施設内の温度管理（30℃以上の高温を避けるなど）に十分注意し、発病や被害拡大の阻止に努めます。

2) カビ(糸状菌)

カビによる苗立枯病として、**①ピシウム菌、②フザリウム菌、③リゾクトニア菌、④リゾープス菌、⑤トリコデルマ菌**などがあります。①はカビの発生がほとんど見られませんが、②では、モミを中心に白色ないし淡紅色のカビ、③では、クモの巣状の白いカビや菌核、④では、表面全体に白色～灰色のカビ、⑤の一種は、表面やモミに初めは白色で、後に青緑色に変わるカビが発生することで区別することができます。

防除対策

育苗中の薬剤防除として、下記を参考に**予防や早めの防除対策に努めてください**。

第1表 水稲の育苗中に発生する苗立枯病の主な防除薬剤

(令和6年3月21日現在)

薬剤名	ムレ苗防止	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾクトニア菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	苗立枯細菌病	希釈倍数および使用方法	使用時期	使用回数	その他の使用目的	分類
タチガレエース M粉剤	○	○	○					育苗箱1箱当たり6~8gを土壌に均一に混和する	播種前	1回	根の生育促進	4と32
ナエファイン 粉剤	○	○	○		○			育苗箱1箱当たり6~8gを土壌に均一に混和する	播種前	1回	根の生育促進、移植後の活着促進	U17
タチガレエース M液剤	○	○	○					1,000倍液を、育苗箱1箱当たり1ℓ土壌灌注	播種時	1回	移植時の活着促進、根の生育促進	4と32
ナエファイン フロアブル	○	○	○		○			2,000倍液を、育苗箱1箱当たり0.5~1ℓ土壌灌注	播種時	2回以内	根の生育促進、移植後の活着促進	U17
								1,000倍液を、育苗箱1箱当たり0.5ℓ土壌灌注				
カスミン液剤							○	4~8倍液を、育苗箱1箱当たり50mlを播種した種籾の上から均一に散布	覆土前	1回	いもち病(苗いもち)、幼苗腐敗症(イネもみ枯細菌病菌)、褐条病	24
ダコレート 水和剤			○		○	○		400~600倍液を、育苗箱1箱当たり0.5ℓ灌注 ※	播種時~緑化期、但し播種14日後まで	2回以内		1とM5
ナエファイン フロアブル	○	○						1,000~2,000倍液を、育苗箱1箱当たり0.5ℓ土壌灌注	播種時~緑化期	2回以内	根の生育促進、移植後の活着促進	U17
バリダシン 液剤5				○				1,000倍液を、育苗箱で1箱当たり500ml灌注	播種時~発病初期	1回	苗立枯病(白絹病菌)	U18
タチガレエース M液剤	○	○	○					500~1,000倍液を、育苗箱1箱当たり500ml土壌灌注	播種時又は発芽後	1回	移植時の活着促進、根の生育促進	4と32
タチガレン 液剤	○	○	○					500~1,000倍液を、育苗箱1箱当たり500ml土壌灌注又は灌注 ※	播種時又は発芽後	2回以内	移植時の発根及び活着促進、根の生育促進	32

注) 1 育苗箱は30×60×3cmで、使用土壌が約5ℓです。なお、※は上記以外にも処理方法がありますので、適切な処理方法をラベルで確認してください。
 2 タチガレエースMおよびタチガレン液剤には同一有効成分が含まれていますので、総使用回数に注意してください。
 3 分類欄には、FRACコードを記載しました(コードが2つは混合剤)。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

■ 営農 News は J A 全農いばらきホームページでもご覧になれます。